

予測困難な時代と幸福 (Well-being)

—自分を愛せる力—

Society5.0の時代やコロナウイルスの感染拡大等予測困難な時代を受けて、「令和の日本型教育」の構築をめざし、新学習指導要領の着実な実施とICTを活用するGIGA構想の実現、また、働き方改革の推進などを盛り込んだ中教審答申が発出されました(2021.1)。めざすは、子どもたちが一人一人のよさや可能性を認識し、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の担い手を育成することにあります。しかし、予測困難な時代を生きるのは子どもたちだけではありません。私たち教員もまた、これまで誰も経験したことのない時代と向き合わざるを得ないのです。今まで経験したことのない変化、つまり前例がなく正解が見えない問題に取り組まなければなりません。

RADWINPSが『18祭』で制作した「正解」という曲があります。歌詞には、“ああ 答えがある問いばかりを 教わってきたよ そのせいだろうか”と繰り返されます。そして、僕たちが知りたかったのは、“なに一つ見えない 僕らの未来だから、喜びが溢れて止まらない 夜の眠り方、悔しさで滲んだ 心の傷の治し方、傷ついた友の励まし方”と続きます。自然災害やコロナウイルスの感染拡大、混とんとした社会の中での傷つきが増えていきます。そんな傷の癒し方を子どもたちは知りたがっているのです。そして、友との卒業の別れからの日々をどう生きればいいのかを自分の最後の問いにし、採点基準や答案用紙はこれからの人生であり、答え合わせの時にはもうこの世に私はいないと締めくくられています。18歳の青年期の心情が等身大で表現されています。

この歌を知ったのは、いろいろな理由で親と共に生活ができない中学生の学習発表会でした。“喜びが溢れて止まらない夜”をこの子たちは味わったことがあるのだろうか、私たち教員は

子どもたちの間に答えてこられたのだろうか、心の痛みを感じました。予測困難な時代だからこそ、もっと私たちはこうした生きるための知恵や行動、すべての感情の扱い方を子どもと一緒に学ぶことが必要なのではないのでしょうか。なぜなら、私たち自身もそのような教育を受けてきた経験がないからです。

テレビドラマ“僕らは奇跡でできている”を見ておられましたか。高橋一生が演ずる一輝という主人公は、自分の特性を学校で受け入れられずに生きづらさを感じながら、やがて祖父の支えもあって自分らしく生きていけるようになります。自分らしく生きることの難しさで苦しむ人たちは一輝とのふれ合いを通して自分自身を取り戻していくストーリーです。一輝が「一番友達になりたかったのは自分です」と語る場面があります。自分のことを自分が認められなくて苦しかったのです。そんな子どもや大人がたくさんいるのではないのでしょうか。友達や親に迷惑をかけないようにいつも他の人と同じようにすることを求められたり、人と違うことを否定されたり、学校教育を通して自分を愛せない子どもにしてしまっている面もあるのではないのでしょうか。

予測困難な社会を生きるためには、多様な考えや個性が必要とされる時代です。均一な子どもを育てるのではなく、でこぼこのある子を育てて、“でこ”を他の人の“ボコ”と組み合わせることで新しい価値を生み出すことができるのではないのでしょうか。違うことが喜びとなり、違うことを他者や社会のために活かす喜びを感じる子どもを育てたいと思います。他者から必要とされることや他者の役にたてる経験が幸福 (Well-being) を高め、幸福を感じる人は周囲に良い影響を与えることができる人でもあります。これからも学校の先生方と一緒に、子どもたちが自分を愛せる力を育める教育実践を進めていきたいと思っています。

R RITSUMEIKAN

菱田 準子 (本学教職研究科教授 臨床教育学)